神戸女子短期大学　論攷　五二巻　一―九（二〇〇七）

―資　料―

平成以降の小学校国語教科書における短歌教材について（1）

入　江　昌　明

一　はじめに

現行の小学校学習指導要領の「第1節　国語」の「第3　指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」には、「（2）教材は、次のような観点に配慮して取り上げること」として、「ア」～「コ」の十項目が挙げられている。その中に、「イ　伝え合う力、思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つこと」、「キ　自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと」、「ク　我が国の文化と伝統に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと」の三項目がある。奈良時代から現代に至るまで脈々と詠み継がれ、伝統に則って美的感動や日常生活におけるさまざまな思いをわずか三十一音に凝縮して表現する短歌は、前掲の「キ」・「ク」二項目が求める「心」や「理解と愛情」、「イ」の「言語感覚」を育てるのにまさに最適の教材の一つと言ってよいだろう。

ところで、小学校の国語教科書は久しく東京書籍、光村図書、教育出版、学校図書、大阪書籍、日本書籍の六社から出版されてきた。しかし、平成十七年度からは一社減り東京書籍、光村図書、教育出版、学校図書、大阪書籍の五社となっている。平成以降、小学校の教科書は四年、七年、十一年、十三年、十七年と五度に亘って改訂されているが、そうした一連の教科書改訂の中で、前述のような性格を有する短歌教材はどのように扱われてきたのであろうか。本稿は平成以降における小学校の短歌指導の在り方を考察するための基礎資料として、東京書籍、光村図書、教育出版の平成以降の国語教科書に収載された短歌教材を一覧できるようにまとめたものである。

二　短歌教材の収載方法

周知のように、小学校学習指導要領は個々の教材の内容や扱い方まで具体的に指示しているわけではない。従って、短歌教材の取り上げ方も教科書会社によって多少の違いが認められるが、本稿に掲出するにあたっては以下の要領に従った。

※短歌教材は、各出版社別に平成十七年度版教科書から年代を遡る形で掲出した。

※「短歌」と「俳句」で構成された単元に取り上げられた短歌には、収載歌数がわかるよう通し番号を付した。

※作者名や歌集名などはすべてその歌の前行に掲出した。

※作者名や歌集名、短歌中の漢字、歴史的仮名遣いの部分などに施さ

れたルビはすべて教科書通りとした。

※古典教材として取り上げられている『百人一首』も一応、短歌教材として掲出した。

※短歌に関するコラムの類も短歌教材として掲出した。

※短歌以外の教材中に短歌が載っている場合は、その旨を記して短歌だけを掲出した。

三　東京書籍の短歌教材

平成十七年度版教科書

『新編　新しい国語　五年下』

「短歌と俳句を味わおう」（六六頁～六八頁）

六六頁に短歌と俳句に関する簡単な解説、六六頁から六七頁にかけて古歌二首と近現代短歌四首、併せて六首を収載する。①に解説を付す。

①東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ　柿本人麻呂（万葉集）

②五月雨の晴れ間にいでて眺むれば青田すゞしく風わたるなり　与謝野晶子

③金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に　正岡子規

④くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる　北原白秋

⑤いつしかに春の名残となりにけり昆布干し場のたんぽぽの花　俵万智

⑥バス停で礼儀正しくふるさとの言葉をつかう少年に会う

「日本語のしらべ」（一二二頁～一二三頁）に、『百人一首』の次の四首と通釈を収載する。

○田子の浦にうちいでて見れば白たへの富士の高嶺に雪はふりつつ　山部赤人

○久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ　紀友則

○あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも　阿倍仲麿

○いにしへの奈良のみやこの八重ざくらけふ九重ににほひぬるかな　伊勢大輔

一二三頁に『百人一首』についての簡単な解説を収載する。

平成十三年度版教科書

『新しい国語　五下』

「短歌と俳句」（六〇頁～六三頁）

六〇頁に短歌と俳句に関する簡単な解説、六〇頁から六一頁にかけて古歌二首と近現代短歌四首、併せて六首を収載する。①に解説を付す。

①東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ　柿本人麻呂（万葉集）

②五月雨の晴れ間にいでて眺むれば青田すゞしく風わたるなり　良寛

③金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に　与謝野晶子

④くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる　正岡子規

⑤いつしかに春の名残となりにけり昆布干し場のたんぽぽの花　北原白秋

⑥バス停で礼儀正しくふるさとの言葉をつかう少年に会う　俳万智

六三頁に「百人一首」と題し、『百人一首』についての簡単な解説を収載する。

平成十一年度版教科書

『新訂　新しい国語　五上』

「短歌と俳句」（七八頁〜八一頁）

七八頁に短歌と俳句に関する簡単な解説、七八頁から七九頁にかけて古歌二首と近現代短歌四首、併せて六首を収載する。①に解説を付す。

①東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ　柿本人麻呂（万葉集）

②五月雨の晴れ間にいでて眺むれば青田すゞしく風わたるなり　良寛

③金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に　与謝野晶子

④くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる　正岡子規

⑤いつしかに春の名残となりにけり昆布干し場のたんぽぽの花　北原白秋

⑥バス停で礼儀正しくふるさとの言葉をつかう少年に会う　俳万智

八一頁に「百人一首」と題し、『百人一首』についての簡単な解説を収載する。

平成七年度版教科書

『新編　新しい国語　六下』

「短歌と俳句」（四二頁〜四五頁）

四二頁に短歌と俳句に関する簡単な解説、四三頁から四五頁にかけて古歌二首と近現代短歌六首、併せて八首を収載する。①、②、③に解説を付す。

①東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ　柿本人麻呂（万葉集）

②五月雨の晴れ間にいでて眺むれば青田すゞしく風わたるなり　良寛

③金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に
正岡　子規

④くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
北原　白秋

⑤いつしかに春の名残となりにけり昆布干し場のたんぽぽの花
寺山　修司

⑥列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし
宮　柊二

⑦街路樹は冬あらはなる枝張りて空の寒さを支へゐたるかな
佐藤　佐太郎

⑧街灯の光とどかぬ舗道にて落ち葉あかるく月照りにけり

四九頁に「**百人一首**」と題し、『百人一首』についての簡単な解説を収載する。

平成四年度版教科書
『新しい国語　六上』
「短歌と俳句（詩歌）」（八〇頁〜八五頁）

八〇頁から八二頁にかけて①と②の古歌について解説し、その後八二頁に近現代短歌四首、併せて六首を収載する。

柿本　人麻呂（万葉集）

①東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ
藤原　敏行（古今集）

②秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
正岡　子規

③くれなゐの二尺伸びたるばらの芽の針やはらかに春雨のふる
与謝野　晶子

④夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり
佐藤　佐太郎

⑤街灯の光とどかぬ舗道にて落ち葉あかるく月照りにけり
木俣　修

⑥夕なぎのひかり濁れる坂下にまだリベットを打つ音やまず

平成四年度版教科書
『新しい国語　五下』
「詩を読もう」の「石川啄木の作品」に、以下の二首を収載する。

○晴れし空仰げばいつも
　口笛を吹きたくなりて
　吹きてあそびき

○ふるさとの山に向かひて
　言ふことなし
　ふるさとの山はありがたきかな

四　光村図書の短歌教材

平成十七年度版教科書

「国語　六上　創造」

「短歌・俳句の世界」（二三二頁～三五頁）

三三頁に古歌二首とその解説、三五頁に近代短歌四首、併せて六首を収載する。

①石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも　志貴皇子

②秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　藤原敏行

秋立つ日よめる

③夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり　与謝野晶子

④白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ　若山牧水

⑤みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる　斎藤茂吉

⑥街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る　木下利玄

平成十三年度版教科書

『国語　六年（上）　創造』

「短歌・俳句を味わおう」（三二頁～三四頁）

三二頁から三三頁にかけて古歌二首と近代短歌二首、併せて四首を収載する。

①石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも　志貴皇子

②秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる　藤原敏行

③金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に　与謝野晶子

④みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる　斎藤茂吉

三四頁に**「短歌と俳句」**と題し、短歌と俳句に関する解説文を収載する。

平成十一年度版教科書

『国語六上　創造』

「短歌と俳句」（二六頁～三一頁）

二六頁に短歌と俳句の簡単な解説、二七頁から二九頁にかけて古歌二首と近代短歌五首、併せて七首を収載する。①と②に解説を付す。

①石走る垂水の上のさわらびのもえ出づる春になりにけるかも　志貴皇子

②秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　藤原敏行

③夏の風山より来たり三百の牧の若馬耳ふかれけり　与謝野晶子

④晴れし空あふげばいつも　石川啄木

口笛をふきたくなりて
ふきてあそびき
北原　白秋

⑤石がけに子ども七人こしかけてふぐをつりをり夕焼け小焼け
斎藤　茂吉

⑥みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる
窪田　空穂

⑦ほうせん花散りて落つれば小きかにはさみささげておどろき走る

平成七年度版教科書

『国語六上　創造』

「短歌と俳句」（二〇頁～二五頁）

二〇頁に短歌と俳句の簡単な解説、二一頁から二三頁にかけて古歌二首と近代短歌五首、併せて七首を収載する。①と②に解説を付す。

①石走る垂水の上のさわらびのもえ出づる春になりにけるかも
志貴　皇子

②秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
藤原　敏行

③夏の風山より来たり三百の牧の若馬耳ふかれけり
与謝野　晶子

④晴れし空あおげばいつも
石川　啄木

口笛をふきたくなりて
ふきてあそびき
北原　白秋

⑤石がけに子ども七人こしかけてふぐをつりをり夕焼け小焼け
斎藤　茂吉

⑥みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる
窪田　空穂

⑦ほうせん花散りて落つれば小きかにはさみささげておどろき走る

平成四年度版教科書

『国語六上　創造』

「短歌と俳句」（二〇頁～二五頁）

二〇頁から二一頁にかけて短歌と俳句の簡単な解説、二一頁から二三頁にかけて古歌三首と近代短歌三首、併せて六首を収載する。①、②、③に解説を付す。

①石走る垂水の上のさわらびのもえ出づる春になりにけるかも
志貴　皇子

②秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
藤原　敏行

③大海のいそもとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも
源　実朝

④金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日のをかに
与謝野　晶子
斎藤　茂吉

⑤みちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞただにいそげる
北原　白秋

⑥石がけに子ども七人こしかけてふぐをつりをり夕焼け小焼け
石川　啄木

平成四年度版教科書

『国語六下　希望』

見返しに河井酔茗の次の歌碑の写真を掲載する。

○年ごとにゆづりゆづりて譲り葉のゆづりしあとにまた新しく
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず
山部　赤人

五　教育出版の短歌教材

平成十七年度版教科書

『ひろがる言葉　小学国語　6上』

「短歌と俳句」（五八頁〜六三頁）

五八頁から五九頁にかけて短歌と俳句について解説する中に古歌一首、六〇頁から六二頁に俳句と対照させながら古歌四首、近現代短歌を三首、併せて八首を収載する。六〇頁は「家族」、六一・六二頁は「自然」を詠んだ作品を収載する。

①石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも
志貴　皇子

②たのしみはまれに魚煮て児等皆がうましうましといひて食ふ時
橘　曙覧

③両親の四つの腕に七人の子を掻きいだき坂路登るも
伊藤　左千夫

④たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず
山部　赤人

〈富士山〉

⑤田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ富士の高嶺に雪は降りける
柿本　人麻呂

〈野〉

⑥東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ
良　寛

〈春〉

⑦かすみたつ長き春日に子供らと手まりつきつつこの日暮らしつ
与謝野　晶子

〈秋〉

⑧金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に

平成十七年度版教科書

『ひろがる言葉　小学国語　6下』

「日本語の文字」の解説文中に、万葉仮名で次の一首と口語訳を収載する。

○銀母　金母　玉母　奈尓世武尓　麻佐礼留多可良　古尓斯迦米夜母

平成十三年度版教科書

『ひろがる言葉　小学国語　6上』

「短歌と俳句」（四八頁〜五五頁）

四八頁から五一頁にかけて「子供」に関わる古歌二首と近現代短歌五首、併せて七首を収載し、各歌に短文の解説を付す。

防人の歌

①父母が頭かきなで幸くあれて言ひしけとばぜわすれかねつる
木下　利玄

②妹の小さき歩み急がせて千代紙買ひに行く月夜かな
羽場　百合子

③列に遅るる児を待ちおれば花びらをティッシュに包むお母さんにと
良　寛

④かすみたつ長き春日に子供らと手まりつきつつこの日暮らしつ
窪田　空穂

⑤落ち葉たく火もて焼きたる大きいも顔よごし食ふ我と童と
石川　啄木

⑥晴れし空あふげばいつも
口笛をふきたくなりて
ふきて遊びき
俵　万智

⑦思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ

平成十一年度版教科書

『国語　6下』

「短歌と俳句」（二二頁〜二七頁）

二二頁から二三頁にかけて正岡子規の短歌と芭蕉の俳句を例に挙げながら短歌と俳句について解説した後、二四頁から二五頁に古歌二首と近現代短歌五首、解説文中の子規の短歌も併せ八首を収載する。

八

正岡　子規

①くれなゐの二尺のびたるばらの芽の針やはらかに春雨の降る

防人の歌

②父母が頭かきなで幸くあれて言ひしけとばぜ忘れかねつる
良　寛

③かすみたつ長き春日を子供らと手まりつきつつこの日暮らしつ
窪田　空穂

④落ち葉たく火もて焼きたる大きいも顔よごし食ふ我と童と
石川　啄木

⑤晴れし空あふげばいつも
口笛をふきたくなりて
ふきて遊びき
木下　利玄

⑥妹の小さき歩み急がせて千代紙買ひに行く月夜かな
羽場　百合子

⑦列に遅るる児を待ちおれば花びらをティッシュにつつむお母さんにと
俵　万智

⑧思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ

平成七年度版教科書

『国語　6上』

「短歌と俳句」（二二頁〜二七頁）

二二頁から二三頁にかけて短歌と俳句の解説、二四頁から二五頁に古

歌二首と近現代短歌五首、併せて七首を収載する。

①銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも　山上憶良

②この里にてまりつきつつ子どもらと遊ぶ春日は暮れずともよし　良寛

③くれなゐの二尺のびたるばらの芽の針やはらかに春雨の降る　正岡子規

④白雲のうつるところに小波の動き初めたる朝のみづうみ　与謝野晶子

⑤晴れし空あふげばいつも
　口笛をふきたくなりて
　ふきて遊びき　石川啄木

⑥春がすみとほくながるる西空に入日おほきくなりにけるかも　斎藤茂吉

⑦四万十に光の粒をまきながら川面をなでる風の手のひら　俳万智

平成四年度版教科書

『新版　国語　6上』

「(1)　短歌と俳句」（三三頁〜四一頁）

三三頁から三四頁にかけて短歌と俳句の簡単な解説、三五頁から三七頁に古歌二首と近現代短歌六首、併せて八首を収載する。①に詳しい鑑賞文を付す。

①くれなゐの二尺のびたるばらの芽の針やはらかに春雨の降る　正岡子規

②銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも　山上憶良

③この里にてまりつきつつ子どもらと遊ぶ春日は暮れずともよし　良寛

④白雲のうつるところに小波の動き初めたる朝のみづうみ　与謝野晶子

⑤石がけに子ども七人こしかけてふぐをつりをり夕焼け小焼け　北原白秋

⑥晴れし空あふげばいつも
　口笛をふきたくなりて
　ふきて遊びき　石川啄木

⑦春がすみとほくながるる西空に入日おほきくなりにけるかも　斎藤茂吉

⑧わが声に似し大きこゑが我を呼ぶわれ小さくなりて樹の上にゐる　前川佐美雄